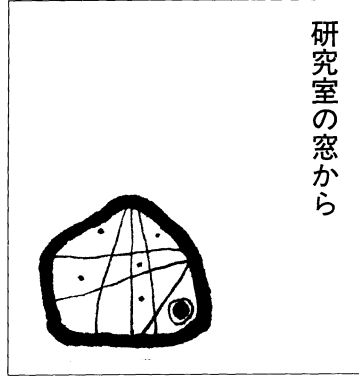


研究室の窓から



絵本と学生たち

宮川 健郎

児童文学担当の教員としてつとめるようになって、もう、九年がすぎようとしている。児童文学研究はまだ若い学問で、国立大学に籍をおく児童文学担当の教員は、ぼくをいれて三人しかない。

大学では、小学校教員養成課程や中学校教員養成課程で国語を専門にしている学生たちとつきあうことが多いが、毎年度前期には、全学の学生を対象とする一

般教育科目「児童文学」をもっている。

児童文学とは何か。右の講義の二回めか三回めには、それを絵本との対比で考える。それでは、絵本とは何か。児童文学とは、どちらがうのか。——絵本とは、まず、「絵」の本である。

レオ・レオニ『あおくんときいろちゃん』（藤田圭雄訳、至光社）は、色紙をちぎった、ちぎり絵の絵本だ。最初に出てくるのは、青いまるひとつ。——「あおくんです」 あおくんは、街角で、さがしていた仲よしのきいろちゃんにばったり出くわす。——「へもう うれしくてうれしくて とうとう みどりに なりました」 青いまるのあおくと、黄色のまるのきいろちゃんは、二つかさなつて、緑のまるになってしまふ……。この作品をささえているのは絵、とりわけ、「色」の原理である。

絵本は、絵が中心だが、児童文学は、言語による芸術である。子ども読者の理解をたすけるために、ほとんどの児童文

学書には、さし絵がつけられているが、本来、児童文学には、絵がなくてもよい。逆に、絵本には、文がなくてもよい。姉崎一馬の写真絵本『はるにれ』（福音館書店）には、まったく文字がないけれども、四季のうつりかわりと、そのなかで生きる木のすがたを描いた傑作である。

……こんなふうに、講義はすすむ。視覚文化としての可能性を追求してきた結果、ことばの芸術としての児童文学とはちがうところへ行ってしまった絵本の鑑賞の方法は、児童文学のそれとは別のものでなければならぬだろう。ぼくとしては、これは、「児童文学」の講義なのだから、言語芸術である児童文学をあつかっていくことにする、絵本は子どものための大切な文化財ではあるけれども、ここでは、考察の対象からははずす、という断りのつもりなのである。

ところが、昨年度の学生たちは、それに納得しなかった。もっと絵本を見せてほしいという要望が、出席票と質問用紙

とを兼ねる紙によって、たくさん寄せられた。昨年度「児童文学」の受講者は、三百人をこえていた。絵本も、大教室に暗幕を引いて、オーバー・ヘッド・プロジェクターで見せたのだった。ぼくは、そのつぎの講義のはじめにも、絵本を教室正面のスクリーンに映し出した。学生たちは、おもしろい、また見たいという。ぼくは、そのつぎの講義にも、絵本をもつて行った。そして、講義のはじめに絵本を見せると、学生たちが集中し、そのあとのぼくの話もよく聞いてくれることに気がついた。結局、半期いっぱい、講義の冒頭で、ぼくは、絵本の読み聞かせをしたのだった。夏休みにちかい教室で暗幕を引けば、かなり蒸し暑いが、それでも学生たちは、一生懸命に聞いた。

どうして、学生たちは、こんなにも、絵本の読み聞かせをもとめたのかと考えていたら、松居直の『絵本・物語るよろこび』（福武文庫）という本に出会った。長年、絵本の編集にたずさわってきた著

者の、絵本に関する啓蒙書である。この本では、就学まえの一年間をへ子どもに絵本を読んでやるのにもっとも意味のある、実りの年」としている。――へなげなら、この一年間で、しっかりと耳で話を聞く力を子どもの身につけさせておくことが、小学校入学の準備として絶対に不可欠なことだからです。いささか「教育的」にすぎる発言のような気がするけれども、このくだりを読んで、ぼくは、あつと思つた。松居直は、絵本が、子どもが他者とのあいだに「話す―聞く」という関係を成立させるための重要な媒介になりうるということをいつている。それは、学校教育ということ以前に、人として生きていくことにとつて、もっとも大切なことだろう。

半期の講義の最終回で、ぼくは、たいへん失礼なことをいうが……と前置きして、学生たちに話した。みなさんは、いまになって、「話す―聞く」関係を成り立たせようとしているのではないか。だ

から、あんなにも熱心に絵本の読み聞かせをせがみ、子ども時代を生きなおそうとしたのではないか。これに関しては、相当な数の学生たちから反応があつた。「そうかもしれない」、「先生に絵本を読んでもらうのは、とても幸福な体験だった。子どものころに、こういう思いをしたことがあまりなかった」――そんな「告白」をする学生も、何人かいた。

「ちかごろの学生たちは、授業中の私語が多い」――同僚の先生たちは、こうおっしゃる。たしかにそうだ。だが、ぼくたちの学生が、そういう学生なら、ぼくは、やはり、大学という場でも、絵本の読み聞かせをしなければならぬのではないか。そのことによつて、学生たちとのあいだに、「話す―聞く」関係をきずかなければならないのではないか。それは、学生たちを、人間として新しく生まれかわらせることだ。だから、ぼくは、しばしば、絵本をかかえて教室へ行く。

（宮城教育大学）